

幼児の手伝いと有能感

山口 茂嘉
(岡山大学教育学部)

1. 研究目的

昨年の本学会において「幼児の手伝いの実態と親の態度」について発表した。その時の問題意識をさらに深めて、本年は、「幼児の手伝いと有能感」とのかかわりについて検討する。

手伝いの体験を通して、幼児が自分の能力に自信を持ち、家族の一員としての役割を自覚し始めると考えられるからである。

2. 研究方法

対象：岡山市内の幼稚園に在籍している4～6歳児計342名とその母親。回収率は、87.6%であった。

調査期間：昭和61年11月13日～21日

調査用紙：昨年の研究で用いた、手伝いの実態に関する7項目の中から有効であった6項目。それに対する親の態度10項目の中から有効であった8項目。それに、幼児の有能感を測定する8項目と母親の定職の有無など付帯質問2項目の計24項目から成る質問紙を作成し、園を通じて、配布、回収した。

幼児の有能感の測定については、桜井・杉原(1985)の「幼児の有能感と社会的受容感の測定尺度」を参考にし、母親に4段階で評定してもらった。たとえば、Q16「おさんは、自分に自信をもっているようですか。に対して、とても自信がある、少しは自信がある、あまり自信がない、全く自信がない、の4つの選択肢から一つを選んでもらうのである。そして、有能感の高い回答から3点、2点、1点、0点と重みづけをして、得点化した。

3. 結果と考察

Q1. あなたの子どもは、家の手伝いをしますか。では、よくする19.9%、ときどきする72.8%、ほとんどしない7.0%、全くしない0.3%であり、昨年の調査結果とはほぼ同じ傾向を示していた。

Q2. その時、お子さんの様子はどうですか。では、自主的にする47.4%、いわれたことだけする46.2%、いやいやする3.2%、けっしてしない0.3%であり、これも、昨年と同じ傾向を示していた。

Q3. どんな手伝いをしますか。での、一人当りの手伝いの数の平均は、5.0であった。そして、幼児がよくしている手伝いの上位5つは、①食事の後片付け14.1%、②おつかい11.0%、③食器を食卓に並べる9.7%、

④調理に参加する9.3%、⑤留守番8.7%であり、これも昨年と同じ傾向を示していた。

Q4. 毎日、何か決まった手伝いをしていますか。では、している36.6%、していない62.6%であった。

Q5. お子さんが好んでやりたがる手伝いがありますか。では、ある84.2%、ない14.6%であった。幼児が好んでやりたがる手伝いは、①調理に参加する、②おつかい、③食事の後片付け、④新聞・牛乳などの取り入れ、⑤食器を食卓に並べる、であった。Q3の幼児がよくしている手伝いと、Q5の幼児が好んでやりたがる手伝いの比較から、幼児は、食事の後片付けよりも、調理に参加することを望んでいる。すなわち、幼児がしたいと望んでいる手伝いと、実際に、させてもらっている手伝いとの間には、ずれが存在すると考えられる。

Q6. あなたは、お子さんの手伝いについてどうふうにお考えですか。では、もっと手伝ってほしい33.0%、今の程度でよい66.7%、手伝いなどあまりなくてよい0.3%であった。幼児の手伝いに対してネガティブな意見としては、子どもに手伝ってもらうと、かえって手間がかかったり、時間がかかるのではというように、母親の側の精神的なゆとりやなさのなさによって理由を記入している母親もあった。

Q7. あなたは、主にどんな理由からお子さんに手伝いをさせるのですか。では、①いろいろな経験を積ませたいから18.6%、②子どもがやりたがるから18.5%、③自分に可能なことを十分に発揮させてやりたいから12.5%、④家族の一員としての義務だと思うから12.3%、⑤人のことを思いやる心を育てたいから10.3%、⑥親子のコミュニケーションがはかれるから9.5%、⑦いろいろな知識や技能を体得させたいから6.5%、⑧自分が忙しいから6.0%、⑨もったいlessnessを感じさせたいから5.1%の順であった。

Q8. お子さんが、あなたの手伝いをしたがる時、どうされますか。では、一切まかせてやらせてもらうようにしている6.7%、まかせるが時には口を出したり手をかしたりすることもある82.2%、そばについて口を出したり手をかしたりする10.2%、手伝わせないようにすることが多い0.3%であった。このQ8とQ1をクロス集計した結果、時には口を出したり手をか

たりするにしても、子どもが手伝いたがった時には、なるべくまかせてやってみよう方が、手伝いをよくする傾向がみられた。

次に、幼児の手伝いと有能感とのかかわりについて検討するために、Q15からQ22までの8つの質問において、各幼児の有能感の得点を算出した。対象児の有能感の得点の分布は、図1に示すように平均が16.7でSDが5.1であった。

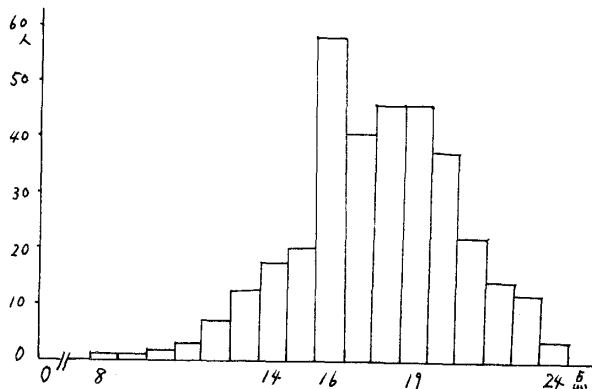


図1. 対象児の有能感の得点分布

この得点分布にもとづいて、0～14点を有能感の低い群（以下、低群と略す）、15～19点を普通群、20～24点を有能感の高い群（以下、高群と略す）として以下の分析をすすめた。

1) 手伝いの状況と有能感

手伝いを良くする幼児と、あまりしない幼児の間に有能感に差がみられるかどうかを比較したのが図2である。なお、手伝いを全くしないのは1名しかいないので、ほとんどいないと合わせた。

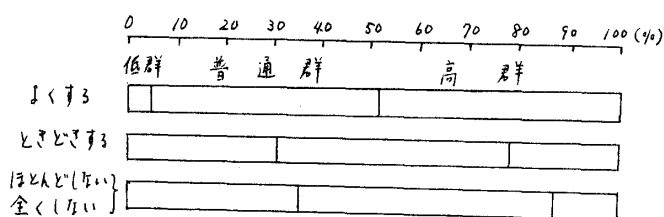


図2. 手伝いの状況と有能感

手伝いを良くする幼児は、有能感も高く、ほとんどしない幼児は有能感が低いことが明らかになった ($\chi^2 = 20.53$, $df = 2$, $p < .01$).

2) 手伝う時の様子と有能感

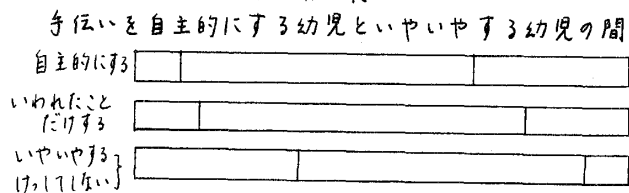


図3. 手伝う時の様子と有能感

に有能感に差がみられるかどうかを比較したのが図3である。手伝いを自主的にする幼児は、有能感も高く、いやいやする幼児は有能感も低いことが明らかになった ($\chi^2 = 7.35$, $df = 2$, $p < .05$).

3) 手伝いの習慣化と有能感

手伝いが習慣化している幼児としていない幼児の間に有能感に差がみられるかどうかを比較したのが図4である。毎日の手伝いが習慣化している幼児の方が、

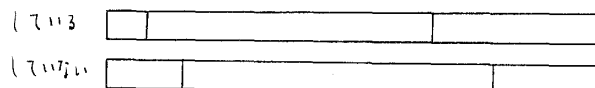


図4. 手伝いの習慣化と有能感

していない幼児に比べて有能感が高いことが明らかになった ($\chi^2 = 7.73$, $df = 2$, $p < .05$).

4) 手伝いたがる時の親の態度と有能感

幼児が手伝いをしたがる時に親がとる態度と有能感との関連を示したのが図5である。幼児が手伝いたが

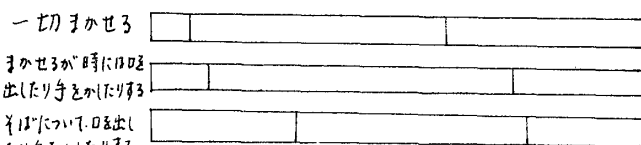


図5. 手伝いたがる時の親の態度と有能感

る時には、一切まかせている方が、そばについて口を出したり手をかたりするより有能感が高いことが明らかになった ($\chi^2 = 11.86$, $df = 2$, $p < .01$).

5) 手伝い終えた時の親の態度と有能感

手伝い終えた時に、親にほめられることと有能感との関連を示したのが図6である。手伝い終えた時に、

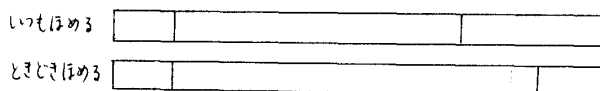


図6. 手伝い終えた時の親の態度と有能感
いつもほめられている幼児の方が、有能感が高いことが明らかになった ($\chi^2 = 6.78$, $df = 2$, $p < .05$).

4. 結 論

子どもたちが手伝いをしなくなったと言われたりして

えしい。
以上の結果より、幼児の手伝いの実態とそれに対する親の態度、そして、手伝いの体験を通して、幼児が自分の能力に自信を持ち、有能感を身につけていることが明らかになった。手伝いなどなくてもよい、お勉強しなさいという現代の知育重視の風潮の中で、手伝いの意義を、もう一度、再認識する必要がある。

本調査にご協力いただいた人見直子さんに感謝します。